

【後日談】お嫁さまは〇〇」をやつ?

(副題: 鮎田さんは耳年増つ?)

窓から差し込む午後の陽射し。繁る常緑樹の葉陰によつて程よく遮られた光は、この座敷の中央を心地よく照らし、さわやかな茶会を麗らかに彩つてくれる。

——ちりん、とひとつ涼やかな音をたて、窓辺に吊られた風鈴が風に揺れた。

「のど」「うは残暑も随分と和らぎ、古き良き日本建築の造りを取り入れた」の座敷においては、風の通りが良い日であれば空調などといった文明の利器に頼らずとも、「うして快適な空間として我々をもてなしてくれる。

快適な空間。そう、快適な空間のはずなのだ。麗らかな午後の陽射し。夏の終わりを感じさせる爽やかな風。揺れる風鈴の音。遠く近く重なる、ツクツクボウシの声。座卓に置かれた、熱い日本茶と和菓子。完璧なまでに『快適な茶会』として謎めいた空間である。

そして田の前におわすは、その茶会の主賓である美貌の我が主。

——否。『元』美貌の、と云つのが正しいか。現在はあまりにあどけない姿となり果て、近所の子ども

もたちと泥まみれで戯れていても、なんら違和感のない姿になられた『お子さま』。……そんなことを口にすれば、容赦なく髪をひっぱられる（最悪むしられる）ことは想像に難くないので、間違つても口にも顔にも出してはいけないが。

そつ、色々と思いつとこるはあるものの、この快適な空間の中、麗し(?)の主の花のかんばせが向かいにあり。その脣からは時に樂し氣に、時に憂いを帶びて、――最近の『生活』のこと語つて聞かせて下さるのだ。そんな午後の茶会が、心地良く感じられるのは当然。……当然、のはずである。

ああ、されど。

何故に私はこいつして益体もない思考にぐるぐると囚われているとこりうのか。

朗々と降り注ぐ天啓の「」とく、主の声に耳を傾けていたのは最初だけ。今はぶつちやけ、『そつそと終わつてくれんかなー』とか考えてたり、明日の行事の進行を脳内試行などして、現実逃避しかかっているのは私だけの秘密である。……バレたらしづかれるぞ、私。

現実逃避。さもありなん。話の内容が、頭に入つてこない。……いや。むしろ入れてはいけない。そういうなれば相手の思いつぼ。深く考えてはいけない。いけないのだ。いけないったら、いけない。いけません。

見てくれだけは完全に『あどけない少女』と言える田の前のお方と、その『かわええ嫁さん』（もち

ろん女性である)との新婚生活。いや、もう「」の際はつきりと(胸の内で)言わせて頂「」。お一方の『破廉恥極まりない夜の生活』……性生活の赤裸々な裏話など!!

女性一人(片方は半分詐欺だと思う)がしじくなく絡み合う、妖艶な絵面が脳内にちらつくが、想像してはけない。……いけませんたら!!

「これは一体何の修行……いや、何の罰なのか。ああ……茶の誘いなど恭しく固辞し、掃除が終わつた時点でさつさと退散すべきだった。そうすれば、一生知らずに済んだであろう『新しい世界の扉』を、「」の歳になつてわざわざ開きかける」ともなかつただらうに。……まさに後悔先に立たず。半刻ほど前の「」の選択に歯噛みするばかりである。

そして。いくら私が現実逃避をしようと、口からエクトプラズムを吐き出せようと、主の口上は止まらない。止まってくれない。

私にできる「」と言えばただひとつ。心を無にして、あるいは現実逃避して、ひたすらに聞き流す「」と。終わりを待つ「」と。これに尽きるのだった。

(以下、宮司の脳内検閲により、一部伏字でお届けいたします)

今日もウチの嫁さんが最高に可愛い。たまらん。

はー、ホンマ感じやすうで、やらしい身体に育つたもんやで、天に感謝してしもたわ……。ウチ神さんやのにな。あははー！

ああ、思い出すだけでいやになつた。あの可愛がり、やうしがせ反戻やわ。そりゃ朝からでも盛つてまうんは当然やろ?

寝起きの嫁さんな？ 甘いのみたいに、やめーつて、ウチに縋りついでくるんよ。あれ、ホンマかわゆうてたまらんのよねー。むーちゃんが、そんなんされたら、そりゃウチから元気になる、決まってるやつだ？

そもそも朝やしなあ。×××が臨戦態勢になつとるのに、ふにゃふにゃのあつたかい嫁さんがす

り寄つてくるやで？そんなん、据え膳以外の何物でもないわ。

ああ、もちろん今朝も美味しーく頂いてきたでえーはー、今日もめっちゃ可愛かつたわあ……ウチの嫁さん。前にちょーっとやらかしてしまって、朝から『せつ×す』はアカン、言われてしまつたから、触りつこしたり舐めつこしたりするだけやけどな。

今朝もあんまり気持ち良すぎで、ついついまぐわつてしまいやつになつたけど、そこは鋼の意志で何とか乗り切つたで。よう耐えたもんやわ、ウチ。偉いやろ？

まあ、なんで朝はアカン……「」になつたか、言つたら「」ないだ、嫁さんのオネダリが聞きたい一心でな？ちょーつと意地悪してしもた、言つつか。

それまでも朝は『激しいの』はアカン、とは言われてたんやけど。まあ、アレや。嫌よ嫌よも好きのうち……言つ感じ？で。夫婦の間の駆け引き、言つつか。そこを如何にでろでろに崩して、求めてもううかが一つの楽しみ、言つつか。その日もそういうノリで……ついつい、な？やりすぎた……つちゅーか。

寝起きの嫁さん、じつもどおりたつぶり可愛がつた後にな？トロシトロになつた嫁さんの下の口に、ちょーつとだけ、先っぽだけ、にゅるんつてひつかけて、入口のど？だけずーとクチュクチュクチュクチュ、しつこーーーねぐり回して。『これは激しないし、入れてくんからせえぶやろ？』言つてイジメて

たら、嫁さん……我慢できんと泣き出しちもてなあ。

あらたまらんかつたわ……！『中に入れて、もっと奥突いて』言つて、腰揺らして泣きながらねだつてくる嫁さん。とんでもない破壊力やつたでえ……！

嫁さんのオネダリがあんまりやらしすぎたもんやから、ウチも完全に頭飛んでしもてなあ。最終的に何回戦? んー、5回戦? くらいしてしもたんよねえ。うん、朝だけで。内3回は、抜かずの3発や!

まあ、その田と次の田が連休やつたらしくて、嫁さんの仕事が休みやつたから良かつたんやけど。結局「田中布団から出られへん」となった嫁さんから、「今後、朝からせ×くすは禁止』で、ほつべつねられてしまんよ。……せやけど、あれは嫁さんが誘つたんやもん……。嫁さんがやらしすぎたせいやもん……。

ああ、もちろんその後も美味しく頂いたで？どうせ布団から出られへんのやし。翌日も休みなら一日中愛し合つのもえやろ、て。」の機会に、あのすげべな身体にウチの愛情をしつかりわからせたらなアカンなーつて！それこそ昼も夜も、ず———つじつくり、ねつちり、日がな一日まぐわつて。

そ、ら、も、う、色々シたでえ？『えろ本』で仕入れた現代の性知識。あの時は大いに活躍してもらおうわ！

嫁さん、もうトロシトロになつてしまつてなあ。最後の方なんか、もうウチが何^三つとも『うそ、うそ、好き、好き』しか言へんようになつてしまつて。ついヤフーヤになつてウチに縋りついてました。最^二高にえろ可愛かつたわあ……。あー、思い出しただけで勃つてしまつやう……。

……けど。その時に、な? ちょっと出来心で試した『ふれい』があるんやけど。あれがなー。ウチ、どいつもひつかかうとするよ……。

今のウチの身体……わかってはおるけど『ちんちくりん』もええと「やし。嫁さんはホンマに満足してくれとるんやろか、て。主に僕の面でな。

そりまあ、あの素直な子おの正直な身体が、嘘なんか吐かれへんのは重々承知しとるで~『身体は正直』やうやつ~「れ、えろ本読んで、めっちゃええ台詞や思たわ! 現代日本人、うまい」と言つな……て、思わず膝叩いてしもたで!

……ああ、ちやううちやう。えろ本ネタは色々やりたい」と一杯あるんやけど、今はそ「やのつて。ウチの身体の問題な。」の『ちんちくりん』で、嫁さんは不満とか感じたりせんやろか……と。

嫁さんと初めて出会つた時みたいに、成体の身体やつたら、『ぼいーん』で『ぼいーん』な乳で嫁さんの顔、やわしーく包んだげたり、白漫の『びつぐまぐなむ』で、奥の奥までじつくりねつちより「ね回

したり。そりもう、ヒヒヒヒ言わしたげられるやけどなあ……。

優しい子おやから『不満なんかない』言つてくれるんやけど、やつぱり成体の時の身体とは全然ちやうんは、自分が一番ようわかつとるからなあ……。なまじ嫁さんにも昔の姿を知られとるいうんも、なんちゅうか……氣がかり、言つた。

『むしろ、もつちよつと控えても……』て、恥ずかしそうに『アハハハ』言つんも、ウチの事気遣つてくれとるんやろなあ……』んな『ちんちくりん』やと体力ないんちゅうか、とか。はー……、よう出来た嫁さんやで、ホンマーハ余計な心配せんために、ウチももつともつと頑張つて励まんと！かわええ嫁さんに『さあびす』せなアカンなあ！

……ああ、アカンアカン。つい話、脱線させてしまうわ。嫁さんの可愛さ、恐るべし……やな！

ほんでな、その『朝から晩までせつ×す』した時に、な？ちよーっと出来心……言つた。夫としての甲斐性を見せたいちゅー、見得……言つたか、男心……言つたか。せつかく嫁さんから毎日、力分けてもひつとるわけやしな？

ちよーっと。最中に、あつちの姿になつてみたんよ。成体のほう。うん、真つ最中。×××入れてる時。奥までぐつちより入つてゐる、まんま真つ最中や。

嫁さん、めっちゃくちゃハシクリしてしまってな？ウチの×××、やる————つて、締め付けたまんま、連續でイッてしまひ。アレ絶対、中の髪が痙攣しどつたなあ……。

「……かつたでえ？普段の倍ぐらの大きさになつたウチの×××、口ひくひくの嫁さんの髪が、ぐつちより絡みついてなあ。そつかりはもう、嫁さんイキつぱなし。ウチのぽいんな乳にも、上の口で甘えて吸い付いて。×××には下の口でおもつちゅう吸い付いて。上も下も、もうどひどひどる。

……で、結局最後はウチが何言つても何しても、ところどころの、ふにゃんふにゃんやし。そちらもう、一晩中めっちゃくちゃ濃厚なまぐわいを楽しんだわけや。

……そんでウチも確信したんよ！ああ、やっぱり嫁さんも成体のウチとの『せ×くす』がしたかつたんや……つて……ずっと物足りんのを我慢させてたんや……つて、反省して。これからは夫の面目にかけても愛し尽くしたらなアカンで、心意氣も新たに、気絶した嫁さん抱えて朝日に警つたわけや！

……せやのに、な、翌朝、その日もまだ休みやつたし、田代覚めた嫁さんとそのまま一戦交えよ……思て、成体の姿のまま田代覚めたちゅーかましたら。ちゅーの後に、ハシクリ言われてん。『大人は禁止、ちんちくりんでいい、ちんちくりんがいい』て！

あんだけ……、あんだけ気持ち良お歸ってくれたのに、やで？何回イつたかわからんくら、どうぶどうに蕩けてたのに、やで？ハシクリ言われてしまたんよ……。『大人はアカン、ちんちくりんがえ

え』で。

何でや!? 何がアカンかつたんや!? ワチ、なんか嫁さん怒り切るような! とじてしもたんかいな!?

……必死に聞いてみたんやけど、嫁さん怒ってる感じやなかつたし、むしろ恥ずかしがつとの言つか、困つてゐ……。言つ感じで。結局答えてくれへんかつたんよ……。

何や……、何がアカンかつたんやろ? ワチ、未だにわからんで、どうもひつかつとるんよねえ……。

「…………」どがあつたんやけど。どう思う、坊(ぼん)？」

「…………」までも一言も」ちらが口を挟む隙す、りくんでからえず。相手の口上はまことに立て板に水。破竹の勢い。光陰矢の如し。……いや3つ目、「これは誤用だ。半分白目をむいて過」した時間の貴重さを思えば、ある意味正しいかもしれないが。……ああ、そうだ。久しぶりに会つた親戚のおばさんの弾丸トーク。うむ、これが的確な表現だらう。

「…………あの、琥珀さま? その……」

内容はさておき意見を求められたわけなので、ようやく一段落したのかのんびり茶をすすり始めた田の前の少女——の姿をした存在に、たじろぎながら声をかければ。「ちーがーの句をつぐ前に、相手はくわっと田を見開くとわなわなと震え始め。

——いかん、何か失言があつただろうか。すわ『髪をむしられる?』と恐れおののくも、そもそもまともな発言などできていないと思い出して首をひねり、告げられる次の言葉をおとなしく待つしかできず。……」の数十年ですっかり染みついた忠犬根性が、正直情けないやり恥ずかしいやりである。

「——ぱつらもしかしたり……嫁さん、実はウチの『ちんちくりんぼでい』が好きな、るうーん? しゃた」「そ、話すやつたりするんかいな……?」

仮にも【神】の口から出た俗世の煩惱に染まり切った台詞¹¹、もはやアルカイックスマイルもかくやと言わんばかりの笑みを浮かべる以外、私に逃避の術はなかつた。——」は寺ではなく、神社だといつて。

さつ、田の前におわす『ちんちくりん』……もとい、少女のような姿をした存在¹²、そ、ま「」となき【神】の一柱。」の稻荷神社が祀る【神】——琥珀をまとおつしやる、自由気ままに長きを生きる【稻荷神】、そのお方なのである。

ただし、今現在この神社におわすのは、術で分かたれた琥珀さまの『影』。つまり分身であり、「本体は『愛しの嫁さん』のところへ居候中といつ、何ともまあ……無茶苦茶な離れ業をやらかす」の方に、もはや只人である自分が何を言つても無駄なことは、子どもの頃から経験上重々……それはもう重々承知しているのだが。

だが、それでも言いたい。せめて心中でだけでも、言わせて頂きたい…………！

わざわざ分身と意識共有してまで、私に新婚生活(というか、新婚夫婦の性生活)の惚氣話を聞かせる必要があるのであるのか?「それも」んな赤裸々に……赤裸々につ……！

今度あなた様の『かわええ嫁さん』にお会いした際、私は一体どのよくな顔をすれば良いと言つのですか?!(主に性生活のお話はかねがね伺つております。いつもうちの主がセクハラ三昧で、大変なご迷惑をおかけしております申し訳ございません)とでも謝れば良いのですか…………!?

——ああ、泣きたい。泣いてしまいたい。

人の心、神知らず…………とでも言おうか、私の心の内など知つた「ちやないと言わんばかりに、琥珀さまの惚氣話(の体を装う猥談)は続く。『それって放送禁止用語では……?』といふような、隙ぞい単語を時に交えながら。

ああ……、もし「」んな状況を他人に見られたら。こんな会話（琥珀さまの独演会だが）を誰かに聞かれたら。

『「あらう」とか神職である宮司が、お稚児さんに妙な性知識を植え付けてる!?』とか、『宮司のせいで琥珀ちゃんが耳年増に!?』とか。そんな恐ろしい噂が立ちでもしたら……。

『「え、それはむしろ逆で！私の方が耳年増にされているのです！逆セクハラなんです！」と主張したところで、まず誰も信じてくれはしないだろう。

耳年増。そもそも私は妻子ある男であり、「」の歳なので、私に「」の言葉を止めるのはおかしいのだが。「」の言葉ほどしつくりくるものが他にないのだから仕方ない。知らんによかつたマニアックな性知識を、「」の歳の男が植え付けられようなどと誰が思う。

ああ。それにしても先ほどのような噂が実際に流れでもしたら。きっと私は「」の町にいられなくなる。『性犯罪者予備軍』のレッテルを貼られて、後ろ指さされながら「」の町を後にしなければならなくなるのだ。残された家族には迷惑をかけてしまう「」とになるな……。すまん……許してくれ、最愛の妻よ、息子たちよ。そして、父さん母さん……不甲斐ない息子をお許しください。

「……なあ、なあつて。ウチの話、ちゃんと聞いてる？坊？」

現実逃避どこかうすら遠のき始めた意識が、走馬灯のように家族の姿をちらつかせ始めた頃。突如にゆつと目の前に現れた饅頭の包みと、かけられた声にはつと我に返れば、正面にはぶくりと頬を膨らませながら片手で頬杖をつき、もう片方の手で饅頭を突き出す琥珀さま(の分身)が。

差し出された饅頭の包みを思わず受け取れば、膨れた頬がにんまりと笑みの形に崩れる。

「はは、相変わらずの朴念仁やなあ、坊は」

『また変顔になつとつたで?』そいつ言つてからりと笑う、その表情。子どもの姿でありながら、子どもには到底作れない、底の知れぬ表情。ああ、やはりこの方は【神】なのだと思い知る。

饅頭の包み紙をはがして半分ほどかぶりつけば、ほくりとした大ぶりの栗がまろび出てくるのに自然と口元が緩む。この和菓子屋は相変わらず良い仕事をしているなど、その味わいに満足しつつ、冷えつつある茶で喉を潤した。

琥珀さまも」の饅頭はお気に入りらしく、包み紙がどんどん積み重なっていく。無心でもぐもぐやつている姿は非常に愛らしく、よつやく訪れた『真に平和な』午後の茶会に、「ちらの頬もほろぶばかり。

……孫ができたら、こんな感じだらうか？まだ見ぬ未来の我が孫へと思いを馳せながら、残り半分の饅頭を咀嚼し、温くなつた茶をすする。ああ、なんと平和な」とか。

だがまあしかし。しがない中年男の平和なお茶タイムなどが長く続いてくれるはずもなく。

「——で。坊はどう思う？嫁さんは『ろりーん』とか『しょたーん』とか言つやつなんかいな？大人の×××やと満足できひん、ちょっと特殊な性癖やつたりするんやろか？まあ、ウチは嫁さんが悦んでくれるんやつたら、何でもかまへんのやけど……」

いそいそと身を乗り出して尋ねてくる【神】に、結局話題はそれなのかと漢泣きする他なかつた。

ちやぶ台に突つ伏す直前、視界に入ったのは新たな饅頭を摘まみ上げた【神】の左手。その白魚のような薬指を彩る金色の円環が、きらりと光り。暗闇で獲物を狙う狐の目のような、不憫なおつさんの姿を見て無邪気に笑う、穢れなき少女の瞳のようなそれが、また何とも眩しかつたのである。

(ロココンとかシヨタコンとかの問題ではなく、奥方は単純に、成体の貴方の絶倫ぶりに憚かれただけなのでは……。そして、それだけセクハラ三昧されても怒らない奥方よ、心が広すぎますぞ……)